

雲南懇話会で行った Field Work の歩み (雲南、崑崙、ネパール)

前田栄三

雲南懇話会、AACK

雲南懇話会は、首都圏在住の京都大学学士山岳会（以下「AACK」という。）会員有志が中心となって、2004年12月に発足した。発足に先立つ2002年、崑崙山脈西部地域の未踏峰登山の検討が行われていた。本稿では、2002年以降2004年までの間に行われた山旅（3回）と、雲南懇話会として、私が企画し参加した8回のField Workについて、記録を整理し回想した（雲南懇話会としては全12回、行われている。）。残る4回のField Work及び雲南懇話会が主宰した3回のタイ文化圏^{註1}Study Tourについては、記録するにとどめた。

1. はじめに

私自身の中国西域への旅は、2002年の崑崙西部・コングル山群の未踏峰登山の検討から始まった。

この計画は、2003年春に発生したSARSにより中国への渡航自粛勧告がなされ、中止の止むなきに至った。残念な気持ちを東南アジアの最高峰キナバル山（4095.2 m）登山に切り替え、2003年8月に登頂した。（隊長：安仁屋政武 AACK 会員）
2004年4月、西安城西の大門（安定門）上に立ち、遥かに西方を望み、（陸路）ウルムチ～（空路）～カシュガル～イエチエン～ホータン～ニヤ～砂漠公路（塔中油田）を経て～クチャ～コルラ～トルファン～夜行列車～柳園（敦煌往復）～寝台列車で河西回廊地域を経て西安に帰着した。シルクロード探訪の旅の始まりである¹⁾。

2004年9月～10月、崑崙山脈西部地域の未踏峰の探索に出かけた²⁾。（隊長：伊藤寿男 AACK 会員）
2005年7月～8月、崑崙山脈西部の未踏峰（6345 m）に登頂し、ユメムスターグと命名した^{3)註2}。（隊長：伊藤寿男）

2005年10月～11月、雲南懇話会として初めてとなるField Work（以下、「FW」という。）を、徳欽～飛來寺～明永村・明永氷河～雨崩村地域で行った。小林尚礼 AACK 会員により企画され、現地の案内を受けた。第1回雲南FW⁴⁾⁵⁾⁶⁾である。

2006年10月～11月（第3回雲南FW⁷⁾）、シーサンパンナタイ族自治州・景洪～思茅（現・普洱）～鎮元鎮～景東鎮～大理～博南古道～保山～臥仏寺、太保山公園～蒲缥鎮を経て、騰衝（騰沖）～国殇墓園、来鳳公園、華僑の故郷「和順郷」訪問。騰衝～龍陵～惠通橋から松山（拉孟）戦跡を訪問、黙祷を捧げた。



怒江（サルウィン河）を境に対峙する中国雲南遠征軍（左手、摺鉢山）と右手、日本軍拉孟（中国側は「松山」と呼ぶ。）陣地に至る山稜。怒江に架かる惠通橋、龍陵の中心地に残る日本軍トーチカ。来鳳山、松山（拉孟）に残る日本軍の塹壕の例。松山（拉孟）に残る、飛び交う銃弾で幹を抉られた樹木。

龍陵～茫市（路西）～瑞麗訪問。茫市より空路昆明（中国科学院昆明植物研究所、西山森林公園訪問）～景洪（民族風情園、原始森林公園訪問）～チェンマイへ移動。騰衝（騰沖）は、インド・ミャンマー・チベットに抜ける重要地点。軍事的要衝である。中国各王朝はこの地に重歩兵を駐留させ、チベット・ミャンマーに対する備えとしたという。2007年、崑崙山脈西部の6232 m 峰・6468 m 峰に登頂。（隊長：安仁屋政武、第4回FW^{8) 9) 10)}）。

2008年は特記すべき年となった。この年から、雲南大学民族研究院・尹紹亭（YIN Shaoting）教



松山（拉孟）主戦場跡には1986年5月24日建立の碑があり、「1944年8月20日から雲南遠征軍第8軍が総攻撃、9月7日、日本軍最後の拠点を落としたが惨烈を極めた」と書かれていた。碑の周囲を清掃し、黙祷を捧げ冥福を祈る。

授（以下「老師」という。）と共に雲南省内の各地域を訪問することになった。全5回、2008年、09年、10年、11年、そして2016年に実施した。2009年7月、崑崙山脈西部の未踏峰（6851m 峰）を目指し周到な準備を進めてきたが、出国直前に発生した「ウルムチの暴動」により中止を余儀なくされた。彼らは直ちにネパールへ転進した（第7回雲南FW^{11) 12)}）。

2. 老師と共に行なわれた雲南の少数民族を訪ねるFWの概要

雲南省全図には、訪問した地域の代表的な街の名を1～2点、示した。赤丸は、恵通橋を表している。

第1回目（2008.11.2～2008.11.15）（第5回雲南FW^{13) 14) 15) 16)}）は、省都昆明市の南、紅河流域及び哀牢山地に住む少数民族（花腰タイ族、ミャオ族、ハニ族、イ（彝）族、チワン族）の村を訪ねた。

昆明市から玉溪市に入り、新平県～紅河河畔の腰街鎮・南碱村（花腰タイ族文化生態村）～東方の紅河州建水県～個旧市～山上の苗族村（卡房鎮）～蒙自市～山上の元陽・旧県城～開遠市（以上、紅河州）、更に東方の文山州丘北県・仙人洞村（彝族文化生態村）～弥勒市～石林県を経て昆明市に帰着。

山地に住むミャオ族の本葬儀の様子、元陽県ハ



ニ族の大規模な棚田を視察した。タイ族文化生態村では民家に分宿した。

第2回目（2009.11.2～2009.11.15）（第6回雲南FW^{17) 18)}）は、主として紅河の南、ヴェトナム国境地域を目指した。まずは金平苗族瑶族タイ族自治州金河鎮・タイ族村、金平県金水河鎮・瑶族村を訪問。紅河左岸沿いを走り国境の町・河口瑶族自治州・河口鎮（ヴェトナム側は「ラオカイ（老街）」という。）・壮族（チワン族）村、国家森林公园（原始森林）「花魚洞」を訪問。

その他、石林県月湖村（彝族の支系、サニ族）、元陽県梯田鎮の棚田（哈尼（ハニ）族）、昆明市にある雲南省博物館・雲南民族村・雲南民族博物館、李家山博物館（江川県、青銅器）、紅河博物館（蒙自県）、中国科学院昆明植物研究所・植物園を視察した。

第3回目（2010.11.4～2010.11.15）（第8回雲南FW¹⁹⁾）は、雲南西北地域の茶馬古道沿いの少数民族（彝族、ペー族、ナシ族、チベット族）の村を訪ねた。具体的には、昆明官渡古鎮、楚雄彝族古鎮、大理白族・劍川鎮、石宝山石鐘寺、沙溪古鎮、大理古城、崇聖寺三塔、香格里拉藏族・中甸古鎮、松贊林寺、独克宗（ドクゾン）古城・大亀山朝陽楼、麗江納西族・麗江古鎮、東河古鎮、麗江古城、白沙村、木府である。

第4回目（2011.10.27～2011.11.9）（第9回雲南FW^{20) 21) 22)}）は、雲南西南地域（古代の西南シルクロード、日中戦争時の援蒋ルート）の少数民族（イ族、ゲンポー族、タイ族、ペー族）の村を訪ねた。タイ文化圏の枢要な地域である。主たる行程は、昆明市～大理經由～保山市～騰冲県～隴川県～凌河県～瑞麗市～芒市鎮～龍陵県～保山市～大理經由～巍山県～昆明市。

第5回目（2016.10.28～2016.11.7）（第12回FW^{23) 24)}）は、雲南省南部のシーサンパンナ（西双版纳）タイ族自治州を訪問した。本来、このFWは2012年10月～11月に実施される予定であった。2011年の大盛況に終わった文化交流、その枢要なメンバーの参加を得て再び交流する運びで、航空券も発券済であった。甚だ遺憾なことに、2012年9月に日本国が尖閣諸島を国有化したことに対する中国国内の反日の動きは凄まじく、このFWは、老師の判断で暫時延期となった。結果として、2016年に実施された。

2016年の主たる訪問先は、景洪、景邁山古茶林、景観保存地区（プーラン族村）、八角塔・茶祖廟・蜂神村、南糯山ハニ族村、西双版纳原始森林公園、曼听公園、中国科学院西双版纳熱帯植物園、易武鎮・茶文化博物館、そして易武・茶馬古道始点に立つ。西双版纳熱帯雨林国家公園、タイ（傣）族村「曼賀」、磨憨鎮（国境税関、土産市場、野菜市場）、傣族村・南腊河傣族集落、ジノー（基諾）族村、普洱市（美術館、博物館）、墨江県（北回帰線公園）、聶耳公園、玉溪博物館、昆明市呈貢区（学園都市）を訪問。

3. 中国入国前の予期せぬ出来事（事例紹介）・・・計画中止1件、ネパールへ転進1件、延期1件

(1) 計画中止の例（SARSの発生による渡航自粛勧告）・・・崑崙からキナバル山へ。

2003年8月、私はボルネオ島サバ州を訪問した。この夏、山仲間と共に崑崙山脈西部の未踏峰を目指す予定であったが、SARS（Severe acute respiratory syndrome、SARSコロナウイルスによって引き起こされるウイルス性の呼吸器感染症）のため中国への渡航自粛勧告が出され、計画は中止。残念な気持ちをキナバル山登山に切り替えた。

以下、当時の私の山旅（サンダカン紀行）日記から抜粋して示します。8月16日、コタキナバルからキナバル山の東、サンダカンに移動し、「八番娼館」そして「からゆきさんの眠る墓地」を探訪、燈明をあげ生花を手向けた。墓地は四段になっていて、最上段の中央にはひときわ大きな「無縁法界之霊」、その段の左端に「法名 釈最勝信女・俗名 木下クニ」と刻まれた2基の墓石があった。この墓地は、八番娼館主であった天草出身の木下クニさんが私財を投じて開いたという。

サンダカンの南方スカウという村に、広大なパームオイルの人工林の中を四輪駆動車で移動し、サバ州最大のキナバタンガン川の支流のひとつムンガル川のリパークルーズも体験（動物観察）。サンダカンの保護センターでは、棲む森を失ったオランウータンに会うことができた。

キナバル山登頂後、山麓の町ラナウの戦争記念公園を訪れて頭をたれ、第二次大戦中に日本軍が開発したというボーリング温泉^{こふせ}で汗を流し、長駆夜道を走ってコタキナバルの町に戻った。

この記念公園は、1944年9月、サンダカン沖の島に収容されていた2400人以上の捕虜（豪英軍）が、サンダカンからラナウへ強制移動させられ、ほとんどの方々が途中で死亡し、ラナウに辿りついたのは僅かに数名のみだったという、その夥しい数の死者を悼む目的で作られた公園である。サンダカンの戦争記念公園と同じく清潔に管理されていた。

1945年2月、キナバルの東、サンダカン・タワオその他の東海岸に布陣していた日本のボルネオ守備軍に、急遽キナバルの南の山麓に広がるジャングルに分け入り、西進してラナウを経てゼッセルトン（1963年コタキナバルと改名）を目指すという転進命令が下った²⁵⁾。この移動作戦は、後に「サンダカン死の行軍」といわれ、戦闘は無かったものの補給を絶たれ衰弱していた守備軍約2万名の約半数（1万余名）が、キナバル山麓のジャングルで暑さとマラリアのため命を落としたという。他の時期を含めると、北ボルネオの日本軍の死者はおよそ1万8千人という。

“補給を絶たれ衰弱していた守備軍”、即ち「餓狼」と化した兵隊達が、上官の意を受けて繰り返し繰り返し幾多の中華系住民・原住民に対して理不尽極まる残虐行為を行っていたことか！山崎朋子さんの小編「東南アジアと日本」に詳しい。隣国インドネシアでは「戦時中の日本人の混血児は4万人」という²⁶⁾。

多数のからゆきさんを送り出してきた島原・天草地方の極度の貧困と言語を絶するその歴史的背景とは！^{27) 28)}

キナバル山頂（05時45分登頂）から眼下の熱帯多雨林を見渡していた時、私の頭は“空”であった。「無知の知」という言葉の意味を思い知らされたのは、この山行の帰国直後のこと。

2003年秋、尾瀬湖畔長蔵小屋の一夜、私がこの「無知の知」に至る経緯を述べた際、間髪を入れず「ソクラテスの認識論的自己反省だ！」と喝破した同行の弁護士がいた。これには、もう一人の同行者（山の先輩）もびっくり。尾瀬湖畔の味わい深い一夜となった。

2018年6月30日、天草・島原地方の隠れキリシタンに関係する諸施設が世界文化遺産に登録され、喜ぶ崎津集落の人々の様子がTVで報じられた。崎津と言えば女衞の手により集められた娘さ

ん達が、何も知らずに舟そして船に乗せられたところである。15年前に訪問したボルネオ島サバ州サンダカン…、改めて以上のような事柄が想い起された。

(2) 渡航断念（出国直前に発生したウルムチのウイグル族暴動）…崑崙からネパールへ。

安田隆彦隊員（AACK）の論考・記録¹¹⁾から、「当初目標」等、一部抜粋して転載する。

- a. 当初目標：2007年8月、安仁屋崑崙隊5名は西部崑崙山脈にある6468m峰、6232m峰を登頂した。この活動途中、鋭いピラミッド型の美しい山（6851m峰）を遠望し、次の目標に相応しいものと考えた。2008年9月、この山を登頂する目的で、安仁屋政武隊長以下、芝田正樹副隊長、遠藤州、出雲路敬明、安田隆彦の5人のメンバーがそろった。準備の一環として11月、12月、2月、4月に雪山を登り、5月に富士山で高度順応訓練と雪氷斜面登高の訓練を行った。
- b. 転進：食料の買い出しを除くすべての準備が整った2009年7月2日、突然現地エージェントから“当該地域は立ち入り禁止になった、代わりにK2方面の未踏峰ではどうか”との申し入れが来た。7月6日、ウルムチで大規模な暴動が発生したとのニュースが飛び込んできた。事態を見守る中、エージェントとの連絡が途絶。外務省掲示板では渡航自粛の表記に変更された。これにより今回の崑崙行きは断念することを決定した。

(3) 中国側からの要請で渡航延期（日本国の尖閣諸島国有化に端を発した中国国内情勢の悪化）

2012年10月29日～11月9日（12日間）、雲南省南部のシーサンパンナタイ族自治州を訪問する予定で、航空券も発券済であった。

東京都による尖閣諸島購入計画が引き金となり、2012年9月11日、それまで私有地であった尖閣諸島の3島（魚釣島、北小島、南小島）が、国有化された。

誠に残念な事に、中国国内の反日・排日の動きが、連日TVで報道される事態となった。

その時期、雲南省を訪れていた東京外国語大学のクリスチャン・ダニエルズ教授が、帰国の途次、

昆明で老師と面談された。2012年9月28日、私は東京外大アジア・アフリカ言語文化研究所にダニエルズさんを訪ね、現地の情勢、老師の意向等を確認した。この日、第9回雲南FWの計画の延期を決めた。

4. 草の根文化交流、雲南の戦い(騰衝(騰沖)・拉孟(松山)玉碎、保山空爆)のこと等(第9回雲南FWから)

2011年秋、中国雲南省西南地域徳宏州雲南タイ族の故郷を訪問した(第9回雲南FW²⁰⁾ 21) 22))。

主たる訪問先は、昆明市～楚雄市～大理経由～保山市～騰冲県～隴川県～凌河県～瑞麗市～芒市鎮～龍陵県～保山市～大理経由～巍山県～昆明市…である。

昆明市では、雲南師範大学と雲南農業大学茶学院で茶文化交流の機会を得た。老師の故郷・梁河県では、南甸土司府内で文化交流会が催された。

第1日、10月27日、各人、北京・上海・バンコク経由で昆明に到着し、阮池銀さん(雲南大学人類学博士課程)、董艳琴さん(雲南大学人類学修士課程、大理白族)、林玲さん(雲南師範大学日本語科OG)の空港出迎えを受け、それぞれ雲南大学賓館にチェックイン。

第2日、10月28日、午前中、雲南師範大学を訪問し、茶文化と書道の交流を行う。範広融さん(雲南師範大学日本語学部部長、副教授)の司会の下、約100名の学生・院生の参加を得た。雲南師範大学日本語科の院生・馬文瑞さんと学生・譚笑さんが、通訳を務めた。学生院生諸君には、和服の上原宗奈裏千家助教授の立居振る舞い、柔和な表情、温かな語り口が相俟って、上原さんの存在それ自体が、日本の茶の心を体現されているように映ったのではないかと感じた。

雲南師範大学日本語科4年生の李冰燕さん(中国茶芸師)が、2010年に続き中国茶芸を実演した。李さんは思茅市(現、普洱市)出身の白族で、今回のFWの通訳も務めた。雲南師範大学の学生食堂で昼食。午後、雲南民族村を訪問。

第3日、10月29日、今日は昆明から保山市への移動日である。途中、楚雄市の楚人古鎮で昼食、保山市に移動して、今回の旅程で最も豪華という「保山官房大酒店」泊。夜は、その名も「駝峰野菌王」と言うレストランで、艾怀森さん(高黎貢

山保護局長、雲南大学生物動物学科卒)と宋平さん(保山市商務局科長)を交えて会食。茸尽くしの宴(鍋料理)となり、雲南松茸の刺身を初めて食した。

第4日、10月30日、騰冲に向かう途中、高黎貢山自然公園(11:50～16:10)を訪問。公園管理事務所内の「方園飯荘」で昼食。昼食には、李家鴻さん(高黎貢山保護区保山管理局程長)他3名が同席。彼ら4人は、私達のために朝から昼食の食材を採取されたそう。野生の雉、地鶏、木耳(きくらげ)など等、自然の食材尽くしの宴である。様々な酒瓶(薬用酒)も並んでいる。山中の茶馬古道を歩き、樹齢1000年という茶樹に出会う。夕方、騰冲市内の来鳳山山頂に立ち、彼我の兵士の冥福を祈る(17:55-18:50)。騰冲の地も漢族資本による観光開発(道路とリゾート開発)が盛んである。

第5日、10月31日、国殇墓園(09:30-10:45)、火山飛瀑(11:00-11:30)を訪問、漢族の文化生態村で知られ華僑の故郷で有名な「和順郷」(古鎮)を歩き、茶馬古道博物館を見る。その後、熱海温泉を訪問(16:20～19:30)。

今回の訪問で、国殇墓園の一面に新たな追悼施設が建立されている様子を眼にした。騰冲・松山・龍陵の戦闘の様子が、それぞれ真新しいひと際大きな石碑に刻まれていた。全ての石碑に「戦闘は凄惨を極めた」旨、刻まれている。

第6日、11月1日、騰冲のホテル「愛麗酒店」を出発し、梁河県に移動。梁河県は、老師の故郷である。老師の先祖は、明軍による「隴川三征」の折、2000人の兵を率いて従軍し、そのまま雲南に留まったという²⁹⁾。梁河県南甸土司府の奥の一角に、老師の祖父・尹明德氏の業績を讃える資料室があった。尹明德氏は、國務院総理・周恩來の片腕(現地責任者)として、ミャンマーとの国境策定に尽力したという。梁河県南甸土司府内で、青年男女3人によるひょうたん笛の演奏があり、チベット族の歌曲が奏でられた。日本の茶が点てられ、書が披露され交歓された。北京で活躍する著名なカメラマン・尹紹平さんも合流し、彼我の交流の様子を盛んに撮影していた。尹紹平さんは老師の従兄である。「土司苑」という名の平屋の宴会場で三卓を囲み、賑やかな会食となった(12:30-14:00)。張さん(徳宏州梁河県文体広電旅

遊局局長)、楊永清さん(徳宏州梁河県書画協会副会長)、莫建凌さん(梁河県旅遊景點管理局局長)、楊常権さん(中国共産党梁河県委宣伝部)達が卓を囲み、給仕の若い女性達が恥じらいながらも和やかに歌唱を披露してくれた。その後、隴川に移動。チンポー族の村を訪問し展示施設を見る(18:05-18:25)。

隴川・麓川は、麗しきタイ族の王国「大モンマウ王国」の中心地域であった。霧立ち込める瑞丽江のほとりを、タイ族は「モンマウ」と呼んだ。地名の「マウ」はタイ語で霧立ち込める様、「モン」は国の意味である³⁰⁾。

第7日. 11月2日、今日は隴川～瑞麗への移動日。勐卯の(モンマウ王国の)歴史遺跡、タイ族の村を訪問する日である。隴川ホテルを出発、瑞丽江の深い霧の立ち込める中を1時間15分程して瑞麗ホテル「勝隆大酒店」に到着。タイ族村そして喊撒契寺を訪問した。ミャンマーとの国境の村(一寨両国)を訪問し、国境管理事務所を視察。昼食は、暖波飯店の池に張り出した開放的な一室で摂った。今回の旅で初めて歌唱が飛び交い老師の奥様も涼やかな声で日本の唱歌を披露された(13:20-15:40)。タイ族の村そして喊撒契寺を訪問、竹壁民家を視察した(16:00-17:00)。移動の途中、村祭り会場を訪れ祭の雰囲気を楽しむ。

第8日. 11月3日、ミャンマー国境の街を視察、翡翠で賑わう辺境の市場を視察、手持無沙汰な顔をした無数の男たちの視線が不気味である。ミャンマー料理店で昼食。莫里熱帯雨林公園を散策(14:20-16:30)。夕食は、瑞丽江の支流沿いの弄坎江魚飯店で、魚尽くしの宴となった(17:15-18:55)。生け簀の魚は、はち切れんばかりの元気さながら、手慣れた女性の包丁捌きは見事である。国境の街の夜は危険が一杯、街路樹が繁茂し街灯は暗く不気味である。

第9日. 11月4日、瑞麗から芒市鎮への移動日である。途中、遮放南見タイ族生態村を訪問、民族文化を体験した。芒市には、かつて日本ビルマ方面軍の師団司令部が置かれていた。前線に龍陵、騰冲、松山(拉孟)等がある。途中の三台山一帯は、敗走する日本軍が最後の一戦を試みた地域であった。南見村は、老師夫人が20歳の頃、1年ほど下放された村である。昼食は、村長の周波月減凹さん(芒市遮放南見村民小組)、元・村の書

記だった金莫栓さんを交え賑やかな集いとなった。芸能・歌唱自慢の女性からは、タイ族の歌を次々に披露していただいた(12:05-15:20)。この日は、三台山の山上にあるトーン族の村を訪問する予定であったが、バスで山道を走るのは無理…との判断が示され、中止となった。村への登り口にあるトーン(徳昂)族博物館を視察した。第10日. 11月5日、この日は、龍陵、松山(拉孟)、保山を経て大理へ移動する予定であった。甚だ遺憾なことながら前夜、「11月1日より、外国人の松山戦跡訪問は事前許可制となった」旨、老師より知らされた。龍陵抗日戦争記念館は休日のため休館、団長の発声で、記念広場で彼我の戦死者に黙祷を捧げた。保山への移動の途中、「松山」を遠望できる地点に展望広場があり、「松山戦跡記念碑」が建立されていた。下車して、遥かに黙祷を捧げる。保山博物館を視察。館内には日中両軍の戦闘の様子が克明に展示されていた。騰冲(1:5.93)、松山(1:5.94)、龍陵争奪戦(1:2.67)とある。日本兵の戦死者1名に対する中国雲南遠征軍兵士の戦死者数の比である。その戦いぶりが我が国の公刊戦史ばかりでなく米国の公刊戦史にも記録されている³¹⁾他、「蒋介石の逆感状³²⁾註³⁾」として今もなお語り継がれている。

保山市は、日本軍機による空爆を受けている^{註4)}。易羅池公園に建立(1995年1月)された滇西抗日戦争紀(記)念碑には、爆弾・細菌弾を投下され甚大な被害を蒙った様子が刻まれていた。

第11日. 11月6日、午前中は大理三塔、大理古城内の散策等、自由に行動。14時、大理ホテルを出発、16時には巍山ホテル「藍龍花園酒店」にチェックイン。偶々古城で「巍山県55周年祭(イ族)」が行われていた。夕食後、巍山古城の城楼上で南詔古楽器演奏団による道教古歌の演奏を鑑賞し、交歓した(20:00-21:00)。

第12日. 11月7日、55周年会場で少年少女数グループの踊りを観賞の後、巍山を出発し昆明に戻る。夕食後、昆明映像を訪れ楊麗萍の孔雀の舞その他の演舞を観賞する(19:45-22:00)。何回見ても感動する。

巍山は、大理(下関)の南約60kmの地点にある南詔国発祥の地である。巍山古城は、明朝時代の1389年の築造という。

第13日. 11月8日、早朝、2名は中国法曹関係

者との面談等のため上海に移動。8名は午前中自由行動、内7人は「花鳥広場」という土産物屋街へ行く。午後、雲南農業大学（茶学院）を訪問、お茶と書の交流を行う（14:40-17:25）。昼食時に老師の友人・蔣大康さんが合流する。蔣大康さんは、著名な書家で指墨画家といい、交流の間でも書と指墨絵を披露された。交流会場には100人ほどの学生院生が集まっていて、「熱烈歓迎日本―雲南懇話会一行」と書かれた横断幕が掲げられ、茶学院の男女の茶芸本科生による踊りと歌と音楽が披露された。雲南農業大学内の「茶苑」で、夕食会が開かれた（18:00-19:30）。雲南農業大学副学長で党委副書記の李永勤さんご夫妻他が参加された。

第14日、11月9日、ホテルのチェックアウトを以て解散。お疲れさまでした。

5. 他の雲南FW、及びタイ文化圏Study Tourの記録

2006年、石楠花の花咲く頃に雲南省西北部から四川省にかけて「花の旅」が行われた。第2回雲南FW³³⁾ 34)。

2014年10月～11月、ネパールのマーディ・ヒマール（Mardi Himal）トレッキング。第10回雲南FW³⁵⁾。

2016年4月、ネパール・ムスタンのトレッキング。第11回雲南FW³⁶⁾。

・・・・・・・・・・

2011年2月、タイ王国北部の旅。第1回タイ文化圏Study Tour³⁷⁾。チェンマイ、郊外の「インパール戦線戦没者慰霊碑」にて黙祷～DOI・インタノン国立公園、タイの最高峰山頂に立つ～パーイ～メーホンソン～クンユーム（戦争博物館訪問、終戦の詔勅を見る！）～メーラノーイ～メーサリアン～ジョムトーン～チェンマイに帰着。

2011年7月、タイ王国北東部の旅。第2回タイ文化圏Study Tour³⁸⁾。

チェンマイ～メーサイ（ミャンマー側に入国。）～Golden Triangle地域、古都チェンセン、アヘン博物館、日本兵の慰霊碑等訪問～チェンライ、山岳民族博物館訪問～チュンコーン～メコン河を渡りフエサイ（ラオス）～チェンマイに帰着。

2013年10月～11月、タイ王国北部の旅。第3回タイ文化圏Study Tour。

チェンマイ～DOI・アンカーン～DOI・メーサロン～Golden Triangle地域、メコン河中洲の村を訪問～チェンマイを経て～スコタイ～ターク～メーソット（ミャンマー側へ入国）～チェンマイに帰着。

6. あとがき

2018年8月15日、NHK-TVで「ノモンハンの真実」という番組が放映された。ドローンにより空撮されたノモンハンの戦場（日本軍の塹壕陣地）が映写され、思わず凝視した。スターリンの問いに答えたジューコフ元帥の言葉³⁹⁾ 40) が脳裡を過ぎり、同時に、援蒋ルート of 雲南の戦跡、凄惨な戦闘の様子、非戦闘地域の甚大なる惨禍が重なった。

私たちは、過去を知り、知ろうと努め、忘れない努力を怠らないよう努めることが、いつの世にも肝要なことだと痛感する。そのことが、訪問者としての地域との交流の礎となることも実感するところである。

雲南懇話会は、発足以来“夢、好奇心”を標榜してきた。近年、“探求心”の一語が加わった。ボケ予防・ボケ防止から“ボケ封じ”に軸足を移しつつある証である。

雲南FWで5回に亘り帯同いただいた雲南大学民族研究院教授の尹紹亭さんに感謝します。

文化交流の任に当たられた上原美奈子さん（茶道）、田原健司さん・亀田義憲さん（書道）、岡邦俊さん（歌唱、中国語版「草原情歌」）に感謝します。私がキナバルへ行くことを知り、“サンダカン八番娼館”の一読を勧められた谷口朗さん、ありがとうございました。

註

1. 新谷忠彦「タイ族が語る歴史」2008年3月、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、叢書 知られざるアジアの言語文化Ⅰ、序文（京都大学名誉教授 石井米雄）P iii、解説 P3～15。
2. 中国カシュガル登山協会発行の「登頂証明書、Certificate」が、京都大学笹ヶ峰ヒュッテに保管されている。
3. ウィキペディア「拉孟・騰越の戦い」より要部を転載する。
1944年9月7日をもって（松山（拉孟）での）全戦闘は終結した。（日本軍守備隊）1300名の

兵力のうち、残存兵力はゼロ、すなわち玉碎であった。一方の中国軍も日本軍の数倍の死傷者を出した。拉孟の戦いについて、9月9日に蒋介石は次のような"逆感状"をもって雲南遠征軍を叱咤激励した。

“わが将校以下は、日本軍の松山守備隊あるいはミイトキーナ守備隊が孤軍奮闘最後の兵に至るまで命を完うしある現状を範とすべし” — 防衛庁防衛研修所戦史室 編、『イラワジ会戦 ビルマ防衛の破綻』朝雲新聞社〈戦史叢書 25〉、1969年 p285

- 註 4. 例えば、【山田正行：アイデンティティと戦争 — 戦中期における中国雲南省滇西地区の心理歴史的研究 —、グリーンピース出版会、2002】。
目次には、【第2章 滇西地区における侵略戦争と抵抗、第2節 第1項「三光作戦」(2) 怒江東岸への無差別爆撃、第2項「細菌戦と人体実験」(2) 滇西地区における細菌戦】とある。

参考文献

- 前田栄三：崑崙山脈西部の山旅、高所順応に関する自己体験、ヒマラヤ学誌第8号、137、2007
- 前田栄三：崑崙山脈西部の山旅、高所順応に関する自己体験、ヒマラヤ学誌第8号、131-138、2007
- 前田栄三：崑崙山脈西部の山旅、高所順応に関する自己体験、ヒマラヤ学誌第8号、125-131、2007
- 安仁屋政武：雲南懇話会第1回 Field Work 報告、梅里雪山周辺の氷河と環境変化、AACK-Newsletter No.38、9-12、2006
- 泉谷洋光：雲南懇話会第1回 Field Work 報告、明永村、雨崩村を訪ねて、AACK-Newsletter No.38、12、2006
- 小林尚礼：聖山 梅里雪山の麓の暮らし、第1回雲南懇話会資料、2005
https://www.yunnan-k.jp/yunnan-k/attachments/article/705/20050326_01_03_kobayashi_handout.pdf
- 秋畑 進：シブソンパンナー、茶馬古道、援蒋ルート of 戦跡を訪ねて、ヒマラヤ学誌第9号、209-220、2008
- 川久保忠通：2007年崑崙隊の高峰登攀時に於ける高所生理と登山活動、ヒマラヤ学誌 No.9、159-177、2008
- 芝田正樹、前田栄三：崑崙山脈西部の山旅「6232m 峰 & 6468m 峰初登頂」—2007年7〜8月の記録、ヒマラヤ学誌 No.9、178-191、2008
- 安仁屋政武：西部崑崙山脈の地形と氷河、ヒマラヤ学誌 No.9、192-208、2008
- 安田隆彦：チュルーウエスト峰 (6419m) とアンナプルナ周遊トレッキング (砂漠の崑崙からモンスーンのヒマラヤへ)、ヒマラヤ学誌 No.11、278-287、2010
- 安仁屋政武：ネパール・アンナプルナ山域東側、マルシャンディ川天然ダム — 予察 —、ヒマラヤ学誌 No.11、212-221、2010
- 前田栄三：雲南の山地少数民族の村々を訪ねて 2008年秋、ヒマラヤ学誌 No.11、222-231、2010
- 神山 巍：雲南南部山地の少数民族の村々を訪ねて、ヒマラヤ学誌 No.11、270-277、2010
- 黄紹文、尹紹亭：中国雲南省哀牢山地に於けるハニ族の伝統的な棚田農耕生態 文化及びその変遷、ヒマラヤ学誌 No.12、189-197、2011
- 尹紹亭：雲南の刀耕火種 (焼畑農耕) 及びその変遷、ヒマラヤ学誌 No.10、225-237、2009
- 前田栄三：雲南省南部・ヴェトナム国境地域を訪ねて—2009年11月—、ヒマラヤ学誌 No.12、198-208、2011
- 濱本 満：雲南省紅河下流域の少数民族を訪ねて—紅河哈尼彝族自治州を中心に、見聞記—、雲南懇話会 HP：https://www.yunnan-k.jp/yunnan-k/attachments/article/386/200911_fw07_hamamoto.pdf
- 神山 巍：雲南省西北部茶馬古道沿いの少数民族を訪ねて、ヒマラヤ学誌 No.13、331-340、2012
- 岡 邦俊：旅行者と研究者とのはざまで—雲南懇話会中国法制研究会の活動報告—、ヒマラヤ学誌 No.14、255-263、2013
- 上原美奈子：茶文化交流の向こうにあるもの、ヒマラヤ学誌 No.14、264-272、2013
- 前田栄三：2011年秋、第9回雲南フィールドワークの概要報告 (中国雲南省西南地域 徳宏州雲南タイ族の故郷を往く)、雲南懇話

- 会 HP, https://www.yunnan-k.jp/yunnan-k/attachments/article/544/201111_fw09.pdf
- 23) 長谷川信美：雲南省西双版纳 少数民族と熱帯照葉樹林自然保護区 2000km の旅, ヒマラヤ学誌 No.19, 124-135, 2018
- 24) 清水信吉：雲南。多様な自然, 民族, 歴史そしてその文化の魅力 —第 12 回雲南フィールドワーク報告も交え—, 雲南懇話会 HP, <https://www.yunnan-k.jp/yunnan-k/40-20170417/979-20170417-40-02-shimizu.html>
- 25) 松本國雄「キナバルの東」金剛出版, 1973
- 26) 山崎朋子「サンダカンの墓」文芸春秋, 175-187, 1974
- 27) 山崎朋子「サンダカン八番娼館」文春文庫, 254-272, 1975
- 28) 司馬遼太郎「街道をゆく 17, 島原・天草の諸道」朝日文庫, 2002
- 29) 京都大学東南アジア研究センター「東南アジア研究 Vol.35 No.3」p362, 1997
- 30) 古島琴子「雲南タイ族の世界」創土社, p31, 2001
- 31) 古山高麗雄「龍陵会戦」文春文庫, p359 ~ 360, 2003
- 32) 後勝「ビルマ戦記」光人社, p139 ~ 140, 1996
- 33) 並河 治：雲南省の石楠花, 第 16 回雲南懇話会講演資料, 2010
<https://www.yunnan-k.jp/yunnan-k/p-old/16-20101211/449-20101211-16-04-namikawa.html>
- 34) 並河 治：雲南の山の植物, 第 1 回雲南懇話会講演資料, 2005
https://www.yunnan-k.jp/yunnan-k/attachments/article/706/20050326_01_04_namikawa_handout.pdf
- 35) 安仁屋政武：マーディ・ヒマール・トレッキング, AACK-Newsletter No.72, 10-15, 2015
- 36) 安仁屋政武：ネパール・ムスタンのトレッキングと地形, ヒマラヤ学誌 No.18, 127-146, 2017
- 37) 前田栄三, 斎喜國雄：タイ王国北部の旅 (2011 年の記録) —タイ文化圏を往く—ヒマラヤ学誌 No.13. 319-330, 2012
- 38) 前田栄三, 斎喜國雄：タイ王国北部の旅 (2011 年の記録) —タイ文化圏を往く—, ヒマラヤ学誌 No.13. 330, 2012
- 39) 半藤一利「ノモンハンの夏」文芸春秋, p352, 1998
- 40) 戸部良一 他「失敗の本質—日本軍の組織論的研究」ダイヤモンド社, p37 ~ 38, 1984

雲南、昆明、寸描

左上：移動は全て雲南大学のバスを使用。 左下：雲南大学尹紹亭教授ご夫妻と会食。
 中上：訪問先の村での昼食会後の記念撮影。 中下の2枚：孔雀の舞と少数民族の踊り(伝承)
 右上：中国科学院昆明植物研究所にて。 右下：同研究所古野道客員教授夫妻と会食。



5 回の FW で使用した「雲南大学」のバス。(2008 年撮影)



雲南師範大学での茶文化交流 (2011 年撮影)



雲南師範大学の学生・院生の皆さん。



雲南師範大学にて。前列中央は老師、その後ろが上原美奈子さん。

雲南の戦いー蒋介石総統の逆感状ー (保山市博物館の展示パネルより)

戦役名称	作戦時間	日軍傷亡	我軍傷亡	対比
渡江攻撃戦	1944.5.1-6.21	605 人	1986 人	1:3.28
騰冲围歼戦	1944.6.22-9.14	3075 人	18236 人	1:5.93
松山攻撃戦	1944.6.24-9.7	1280 人	7600 人	1:5.94
平达、蒙达剿匪戦	1944.5.11-9.22	523 人	802 人	1:1.53
龙陵争奪戦	1944.6.5-11.3	10620 人	28384 人	1:2.67
芒市、畹町追歼戦	1944.11.13-45.1.20	4954 人	10645 人	1:2.1
合計	1944.5.11-45.1.20	21057 人	67430 人	1:3.2



梁河県南甸土司府内の交流風景の 1 コマ

雲南懇話会で行った Field Work の歩み（前田栄三）



巍山古城の城楼上で南詔古楽器演奏団による
道教古歌の演奏を鑑賞



雲南農業大学茶学院茶芸本科生による演奏と踊り



雲南農業大学茶学院での記念写真。中央の赤いストールの女性は、雲南農業大学茶学院＆雲南普洱茶研究院院長の邵宛芳さん、その右にティー・リテラシー上原美奈子さん、書道家で山スキーヤーの田原健司さん。前列左端に雲南大学尹紹亭さん（民族研究院教授）、右端から3人目が雲南懇話会代表の安仁屋政武さん（筑波大学名誉教授）。踊り手は全員、雲南農業大学茶学院の学生。雲南農業大学茶学院茶芸本科生3年級、周莹さん撮影。

Summary

Outline of Fieldwork Trips by Yunnan Forum (Yunnan, Kunlun and Nepal)

Eizo Maeda

Yunnan Forum, AACK

Yunnan Forum was commenced in December 2004 mainly by volunteer members of the Academic Alpine Club of Kyoto (AACK) residing in the Tokyo metropolitan area. Prior to this start, in 2002, untrodden peaks of the Kunlun mountains west area were researched, and by 2004, three mountaineering trips were realized. Since 2004 to date, Yunnan Forum has carried out 12 fieldwork trips in areas of Yunnan, Kunlun and Nepal.

In this article, I collated the records with some recollections of the three mountaineering trips carried out between 2002 and 2004, and of eight out of 12 fieldwork trips, which I planned and participated in. On the other four Yunnan Forum fieldwork trips, I only documented. In addition, three Shan (Tay) Culture Area Study Tours that were carried out under the name of Yunnan Forum are described.